

昭和50年代から今も続く、親も子も読んだ教科書の名作物語

まなびや

小学校五年生国語

光村図書

わらぐつの中の神様

杉みき子・昭和39年

特色をとらえながら読み、物語をめぐって話し合おう



雪の降る夜、マサエはこたつにあたりながら、祖母が話す「心を込めて編んだわらぐつ」



つにまつわる娘と大工の話に耳をかたむけていました。話を聞くうち、マサエはそれ



が誰の話なのか、気がつきました。(方言の醸し出す雪国独特の世界が伝わります。)

大造じいさんとガン

椋 鳩十・昭和16年

優れた表現に着目して、物語の魅力伝え合おう



翼に白い模様がある「残雪」と呼ばれるガンと、猟師の大造じいさんとの話。残雪は非



常に賢い鳥で、数年は残雪の圧勝が続きます。ある年大造じいさんは奇策を思いつきま



は昭和55年とガンは昭和52年と現在

▼大造じいさんとガンは昭和55年とガンは昭和52年と現在

- ▼ わらぐつの中の神様は昭和52年と現在
- ▼ 教科書の思い出・印象に残る話(第26号)
- ▼ 墨を塗られた教科書(第27号)
- ※「まなびや」バックナンバー(ホームページに掲載)
- ▼ 福井弁(第5号)
- ▼ 自由採択時代の教科書(第17号)

「方言と共通語」
 小五国語(光村図書)より
 わたしたちは、ふだん、家族や友達と話すとき、住んでいる地方特有の表現をふくんだ言葉づかいをしています。これを「方言」といいます。方言は、そこに住む人々の気持ちや感覚をびったりと言いつたことができます。しかし、ちがう地方の人どうしが、それぞれの方言で会話したのでは、事ながら気持ちもちが正確に伝わらないこともあります。そこで、どの地方の人でも分かる言葉づかいも必要です。これを「共通語」といいます。

方言と共通語は、どちらも大事なものです。それぞれの特徴を良く知り、相手や場面によって使い分けるようにしましょう。

「方言と共通語」
 小五国語(光村図書)より
 わたしたちは、ふだん、家族や友達と話すとき、住んでいる地方特有の表現をふくんだ言葉づかいをしています。これを「方言」といいます。方言は、そこに住む人々の気持ちや感覚をびったりと言いつたことができます。しかし、ちがう地方の人どうしが、それぞれの方言で会話したのでは、事ながら気持ちもちが正確に伝わらないこともあります。そこで、どの地方の人でも分かる言葉づかいも必要です。これを「共通語」といいます。